校歌発表会

昭和五十二年十一月十五日、本校体育館で校歌発表会が行われました。この会には、作曲者の中田喜直先生はじめ、田村玄さん、瀬戸口浩さん、本校卒業の橋爪えりかさん、同じく小木曽桂子さんなど、中田先生の作品を歌って下さる方々を迎え、盛大に行われました。残念なことに、作詞者の宮沢章二先生はお仕事の関係で、御出席なされませんでしたが、すばらしい詩といっしょに、メッセージを送っていただきました。ここでは、「校歌作曲に望んで」と題した中田先生のことばと、メッセージ「校歌を作詞して」と題した宮沢先生のことばを載せてみました。

校歌作曲に望んで

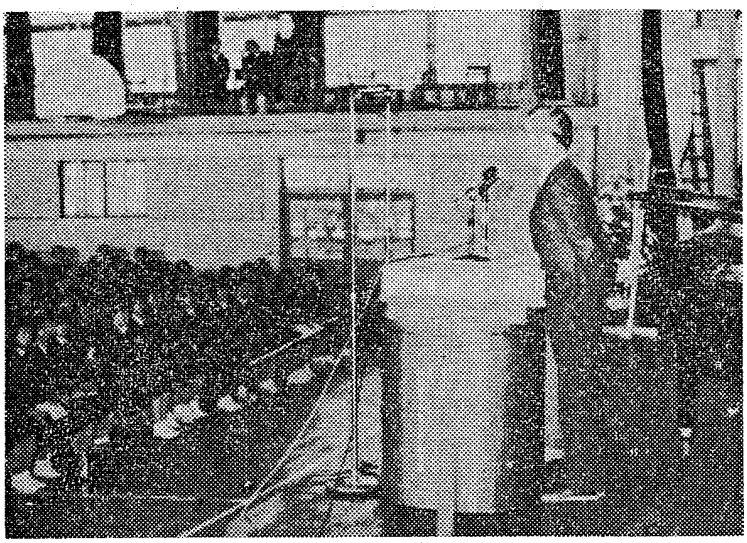
中田喜直

こんにちは、今日はとても良いお天気で、それほど寒くもなく大変気持ちよい日を迎え、非常に幸せに思っております。私がこの学校の校歌を頼まれて作曲をいたしました。本当を言えば、校歌というのはこの学校に関係の深い方が、作詞・作曲すればよいのですがなかなかそういう方はおりませんので、詩人や作曲家に頼むわけです。私はここに住んでいませんけれど、日本に住んでいる同じ日本人ですから、それは私はかまわないと思います。

私は東京に生まれ、ずっと東京にいますけれども、私がこの伊那とどういう結び付きがあるかと言いますと、ずっと前に伊那に一度中学校の作曲に来たことがあるのです。随分昔のことですが。そして今回の校歌を作曲するにあたりましては、私の非常に近い親戚が伊那におりまして、その長女がこの学校に来ていますので、その関係で私が作曲することになったわけです。それから、私は小学校の頃から非常に山が好きでですね、日本中の山の高さとか、世界でどういう山が高いとか、二番目は、三番目は……などということが非常に好きでした。伊那に来ると、どういう山が近くにある、ということで、非常に親近感がありました。そういうこともあって、校歌の作曲を頼まれた時に、すぐそういう山のこととか、親戚のこととか、それからもう一つ、戦争のことを思いました。皆さんは戦争のことはあまり知らないと思いますが、皆さんのお父さん、お母さんは、戦争のきびしさを通り越して、皆さんを生み育ててきたわけですけれども、そういうような戦時中ですね、私はちょうど航空隊におりまして、もうじき死んでしまうのではないかという瀬戸際に、同じ隊にいた伊沢君という人がやっぱり伊那にいまして、昨日も逢いました。そういうように、非常に親しい関係があるわけです。それで今度校歌を頼まれました時に、喜んでお引き受けしました。

ところで、校歌というのは詞がとても重要でして、詞がとても良いと作曲もわりあいうまくいきますけれども、詞があまり良くないと、なかなかむずかしいもんですね。もちろん詞が良くても作曲がうまくいかない、ということもあるわけですけれども、今度は宮沢さんがとても良い詞を作って下さいました。それからこの学校は女子

が多いということですが、これからは男子が多くなるということを考えまして、最初作った時は、あまり男性的になり過ぎてしまいました。どちらかというと将来はいいですけれど、今は女子のことも考えなくてはいけないということで、いろいろ考えた末、校歌にはめずらしく、三拍子にしてみました。これは、私が感じとったいろいろな微妙な問題によるのであって、わざと三拍子にしたのではなく自然にリズムを生かし、音楽を生かす為に、三柏子が一番良いのではないかという結論になり、三柏子の曲想が生まれてきたのです。先に言いましたように、三柏子の校歌は非常にめずらしいんです。ですから、行進曲とかスポーツの応援なんかには少し適当ではないかもしれませんが、音楽としては、三柏子の曲はたくさんあります。たとえば、英国の国歌なんかは三柏子ですね。ともかく私は一生懸命、詞に一番ふさわしい、それから皆さん達が歌うのに一番ふさわしい音楽を作りました。これから皆さんのコーラス部の方が歌ってくれます。それを指導して、それから皆さんが全体で歌って下さるわけですが、生徒の皆さんは歌っておられますけれども、父兄の方々は、今日初めて聞く方がおありと思います。初め聞いた時は、なんだかよくわからない、と思う方がおありかと思います。こういう曲は、なじみが出て初めて、なにか自分達の歌だなあと感じられると思います。たとえば人間の間でも、第一印象ではその人がどんな人だかわからない。初めちょっと変な顔をしていていやだと思っていたけれども、よく話したらとても良い人だということもありますね。そういう意味で、これから皆さんが何回か歌われ、父兄の皆さんもそれをお聞きになってなじみができて、初めて良く理解ができるのではないでしょうか。では、これから生徒の皆さんの歌を聞かせていただきたいと思います。ではこれで、私のことばを終わらせていただきます。



中田喜直先生

メッセージ

校歌を作詞して

宮沢章二

校歌発表会、おめでとうございます。まことに残念ですが、やむを得ぬ仕事のため、本日参上出来ませぬこと、深くおわび申し上げます。

校歌作詞に当たりましては、去る九月十二、十三日の両日、貴校に参り、校長先生はじめ諸先生の御案内により、秋晴れの伊那を、この目で確と見定めることが出来ました。田の稲は重く実り、赤とんぼ飛びかい、周囲の山々は崇高なほどの輝きをもって私の心の底

に焼き付きました。それと共に、学校における先生方との話合い、生徒代表の皆さん方との話合いの中から、貴校の伝統に関して、貴校の精神に関して、さらにまた今後の方向や心構えなどに関して、作詞上参考になるさまざまな事柄を汲み取ることも出来ました。

結局、私自身が貴校関係者の一人になったような気持ちですが、校歌の詩は、そういう心境の中から生まれて参ります。自分もまたその学校の校友の一人であり、教師の一人であり、同時に生徒の一人である、といった立場に自らを置かぬ限り、真実の歌詩は生まれないでありましょう。

校歌は、決して、単なる教訓のうたではありません。おとなが生徒に対して、無理に押しつけるうたでもありません。学校の教育方針は、詩の内容として当然入りますけれど、それだけではないのです。生徒の皆さんが心から共感出来るもの、自分たちの愛唱歌として誇りを持って歌えるもの、とりわけ、高等学校の校歌は、格調の高い青春賛歌でもなければならない、と私は考えております。

どうぞ、先ず声を出して、自分たちの歌として歌詩をお読み下さい。そして、皆さん自身で内容を感じ取って下さい。それから、希望に満ちた若々しい声を合わせて、高らかに歌って下さい。そのとき、名付けようのない何かが、たぶん心のどこかに生まれて来るでしょう。それは、二度とない青春の貴重さを告げるものであり、ある日ある時、ふと自分の歩みの支えになるものであり、同じ母校に学び合う皆さんと心を結ぶものであり、……といった、生命力を持ちつづける歌になりますよう願いつつ、私は作詩いたしたわけであります。どうぞ、この校歌に、生き生きとしたいのちを与えて下さい。最後に、即興の詩を記します。

うたが聞こえて来る
平野に立つけやきの落ち葉を
散り散りにさせる　北風の中から
清潔な合唱が聞こえて来る

あれは　伊那の
夕暮れが早い伊那谷の
冬のさなかでさえ春が燃える
あの　爽やかな弥生ケ丘の
そそり立つ大樹に守られた校舎に
生まれたばかりの　若いうただ

アルプスの峯々は
すでに新雪を置いたであろう
生まれるもの　風も雪も新しく
そこに育つうたの　すがすがしさよ
――すべてが　力に満ちているだろう

わたしは　いま
右の耳に冬の足音を聞きながら
冴えわたる左の耳に
遠い伊那の　春の声を聞いている

作詞者・作曲者の主な作品紹介

作詞者　宮沢章二先生――「あんぶくの臍」「連華」「旅路」「埼玉風物詩集」「空存」「知らない子」

作曲者　中田喜直先生――「夏の思い出」「雪の降る町を」「めだかの学校」「かわいいかくれんぼ」「ピアノソナタ」